

W. H. オーデン、イシャーウッドの中国旅行と思想的・宗教的転回

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2021-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辻, 昌宏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21851

W.H. オーデン、イシャーウッドの中国旅行と
思想的・宗教的転回

辻 昌 宏

The journey to China of W.H.Auden and Isherwood and their political and religious conversion

TSUJI Masahiro

The purpose of this study is to show that W.H.Auden's critical turning point of his thinking lies in his journey to wartime China with Christopher Isherwood and his experience of seeing directly with his own eyes the Japanese army's aggression in China.

From February 1938 to June, he and Isherwood visited China including Hongkong, Hankow and Shanghai. They met the British ambassador, newspaper reporters, missionaries and finally at Hankow Madam Chiang Kai-shek and Mr Chiang Kai-shek. They also met four Japanese elites in Shanghai. They were surprised to hear their complacent attitude towards Chinese people and towards the war between Japan and China. We should keep it in mind that during the period Japanese government adhered to 'old diplomacy' while British government and U.S. government had adopted 'new diplomacy' for some time. Old diplomacy means negotiation by power while new diplomacy implies respecting each nation's 'tariff autonomy' and giving up some of their settlements. Japan was just following the contrary way aggressing the Middle China.

After they returned to England by way of New York, Auden and Isherwood made speech tours around England but both of them became depressed after a while. My point is, they became depressed because while denouncing Japanese invasion repeatedly they must have noticed the possibility of similar brutality of British Empire's invasion, making colonies all over the world. Even if the concept of 'new diplomacy' hadn't existed when British colony was being created, was their brutality to be pardoned? They wrote to a friend that they were fed up with continuing such a speech. And secretly they decided to immigrate to the United States and they would not return to England even after the Second World War broke up.

In 1977, Isherwood commented in his book *Christopher and his Kind*, 'Not until after World War Two, when England had ceased to be imperial and had become a minor power with a cosmopolitan population, did Christopher begin to love it, for the first time in his life. It had turned into the kind of country he had always wanted it to be'. That is the decisive comment. I suppose that in that circumstance Auden, most probably, also held a similar view. That is why they went to US and remained there. Auden, who was searching for his own identity and his alternative life while travelling, eventually met Callman, a young Jewish American, whom he could share the literary tastes with. He could be an alternative existence for Auden sharing English language and tastes for literature and music. Auden, introduced into the world of opera by Callman, worked with him as a librettist.

W.H. オーデン、イシャーウッドの中国旅行と 思想的・宗教的転回

辻 昌 宏

W.H. オーデンは、位置付けが難しい文学者だ。一定の視座から、概ねこんな詩人、こんな思想の持ち主ということが極めて言いにくい。

その規定しにくさのよって来たるるところを、いくつか述べることは出来る。オーデンが生きた時代が世界史的にみて、ヨーロッパ・アメリカの激動の時代であり、彼は欧米の思想的動向、政治的動向に敏感に反応し、かつ、その姿勢、時代との向き合い方に修正を加え続けた。その結果、彼の思想、立場は時の経過とともに、少し変化したり、大幅に変化したりして、一貫性が見いだしにくい。そのくせ、オーデン自身は、その時、その時には、相当に断言するような物言いをしているので、ある時点の彼の発言、叙述を彼のその後にも通用するものと思ひ込むと、思いもよらぬところでハシゴを外されてしまう。カメレオンのと言え言えるし、その時々で感じ、考えるのを停止しないオーデン流の誠実さであったとも私には思える。世界はこうだと必死に考えても、世界自体の枠組みが大きく変容していく時代であったとも言えよう。オーデン流の誠実さ、というのは、一筋縄ではいかないのであるが、それを解明しつつ、彼の思想および詩作における変容を明らかにしていく。以下次のような5つのプロセスで彼の思想および詩作の変容を解明していきたい。

1. W.H. オーデンの中国旅行にいたる軌跡とオーデン世代の課題
2. 中国旅行における思想的転回
3. アメリカ移住の謎
4. アメリカ移住前後の詩作上の変化

1. W.H. オーデンの中国旅行にいたる軌跡とオーデン世代の課題

オーデンは、父方の祖父も母方の祖父も牧師という家に生まれた。母は信心深い人であったというし、その影響は静かに深いものであったろうことは想像に難くない。というのも、オーデンの父は、医者であったが町医者というより研究者的な人であったが、第一次大戦中は地元を離れていた期間も長く、その期間は母子の生活が続いた。父はフロイトの著作をいち早く読んでおり、息子がその著作

に触れることを自由に許しており、知的な形成という面では父の影響も強い。父の蔵書は、理系、文系が区別なく混在するものであった。その影響を直接的に受けたオーデンは、自然科学に興味を持ち、かつ文学的な書物も読む子供であった。

パブリック・スクールやオックスフォード大学在学中も、オーデンは同級生と比較して早熟で、フロイトやマルクス、レーニンの著作についての知識が豊富な生徒、学生であった。

オーデンの父は、息子の海外渡航にきわめて寛容で、ベルリンへの留学をはじめとして、ほぼ毎年のようにオーデンはヨーロッパを広く旅している。本人がどれくらい自覚的であったかはともかく、憑かれたように旅を続けているのには、2つの互いに関連した動機があるだろう。1つはルイ・マクニースとの共著『アイスランドからの手紙』のように自分のアイデンティティーを求める（オーデン父子は自分の祖先がアイスランド系だと信じていた）旅。祖先の地を旅するだけではない。旅をすれば、おのずと自分たちの生き方、考え方が必ずしも当たり前でないことが分かる。自分および自国を相対化し、その偏差を知ることが出来る。そしてもう一つは、それと密接に関連しているが、自分および自分たちにとってのオルタナティブな生き方、考え方、信念を求める旅である。大戦間においては、大英帝国がこのままで栄え続ける（べきだ、はずだ）という現状肯定的な考え方、それに変わって社会主義的な社会に改革あるいは革命を起こすべきだという考え方、それに対する反動として大陸のファシズムに影響を受けた運動などがあった。オーデンは早くからマルクス主義の著作に親しんでおり、左翼的な考えを抱いていたのだが、共産党に入党したり、党の方針を絶対的なものとして奉じるというタイプではなかった。であればこそ、様々な国、様々な人と交流しそこから第3、第4の道が見いだせないか、との思いがあったかもしれない。中国をともに旅するイシャーウッドなどは、アメリカに渡ったのちヨガや瞑想に深く傾倒していくことになるが、それは彼の中で強まる平和主義と折り合いのつく思想が当時のヨーロッパに見いだせなかったためと考えられる。先走って言うてしまえば、オーデンの場合は、マルクス主義に飽き足らなくなって、キリスト教に回帰してしまうことになる。宗教に限定して言えば、キリスト教に対するオルタナティブを求める動きはW. B. イェイツやT.S. エリオットの頃からあった。これは主としてダーウィンの進化論やフロイトの精神分析の衝撃により、聖書や教会の教えをそのまま受け入れられなくなったためと考えられる。オーデンの場合は、父方も母方も祖父が牧師であったし、母は信心深い人であって毎日曜日のミサにオーデンを連れて行くことを欠かさなかったし、また教会で聖歌を歌うことは彼の音楽的素養の基礎をなしているし、彼は6歳のときに侍者をつとめ舟形の香炉を運ぶ役割を担い、後年、宗教に説教から入ったのではなく、儀式から入ったのはよかったと述べている（Carpenter, 6-7）。しかし思春期になると、オーデンは宗教は卒業したとばかりに無関心になってしまう。オーデン世代の場合、世界観を揺るがされたのが宗教的ドグマにもとづく世界観のみでなく、体制選択に関する問題があった。第一次大戦が、ヨーロッパ列強の帝国主義列強の利害調整の破綻を示すだけでなく、ロシアには社会主義革命が起こってソ連が出現し、社会主義革命や社会主義に基づいた国家というものの可能性を選択肢として真剣に考えるようになったからだ。そこが先行するイェイツやT.S. エリオット世代との違いと言えるだろう。

あるいは、こうも言えるかもしれない。オーデンやイシャーウッドらの世代は、目の前に体制選択の問題、具体的な事象としてはスペイン戦争やファシズム、ナチズムの勃興が迫ってきたので、それをどう考えるか、どう対処するか、どう行動するかということが大きくなってきたので、宗教的な問題、内面的な探求を一時的に棚上げにせざるを得なかったのではない。しかし、彼らはもともと政治的な問題・課題を最優先に生きるタイプの人間ではなかった。政治的な活動にどっぷりと浸るとその反動で、宗教的あるいは内面の課題に主体的に取り組むようになったと考えることもできよう。

ヨーロッパ諸国を巡り歩いていたオーデンとイシャーウッドが中国旅行の後に、アメリカに渡り、思想的にも転回するのは、単なる偶然だろうか。そうではないと私は考える。そうではなくて、上記の政治的活動から宗教的課題に取り組む転換点に、中国旅行はなった。そうさせるだけのことが旅行自体にも、旅行後の活動にもあったのだと考える。

2. 中国旅行における思想的転回

以前に私が *Journey to a War* について論じた論考「オーデンの旅と転進」(2018年)では、笠原十九司の『日中戦争全史』上・下などを参照して、オーデン、イシャーウッドの旅の日時が、日中戦争が進展していくどの段階にあったのかを、事変や事件と彼らの旅行記を照らし合わせて明らかにし、武漢(漢口)に彼らが赴いた意味と意義の理解に至った。日中戦争の進展自体が、複雑で、領土的にも広大な地域にまたがり、また戦闘の前線というものが曖昧模糊としていることも多く、オーデンとイシャーウッドもそうした事態への戸惑いを記しているほどなのだ。1930年代の欧米の読者にとって戦争といえば直近の第一次世界大戦が想起されたのは間違いなく、第一次大戦では、戦線が明確でそこで塹壕戦が繰り広げられたというイメージが強い。しかし日中戦争では、必ずしもそうではないのだ。非常に図式的な言い方をしてしまえば、日本側はしばしばこの町を攻め落とせば決着がつくだろうと期待して町を攻略するのに対し、中国側(そもそも中国の側も北京政府と南京政府に分かれていた時期があるし、その南京政府が北伐を通じて統一勢力となってからも、リーダーの蒋介石が共産党勢力を排除したり、国共合作をしたりということで、必ずしも一枚岩ではない)は、長期戦を想定し、一つの町が落ちても広大な中国大陸の奥地へ退却していき短期決戦にはならないのだった。オーデンらが武漢に到達して「今、世界で一番いたいところは漢口(武漢)だ」という明快な断言を読んでも、その意味を理解するのは、現代の英米人にとっても、われわれ日本人にとってもそうたやすいことではないと考える。この断言の意味合いについては後述する。彼らの旅行記の読解には、日中戦争の進展状況というコンテクストを復元しつつ読み解く必要があるわけだ。しかしそれだけでは十分ではないことに思い至った。当時の英米の外交の基本方針がどうであったか、在中国の英米の大使館、領事館ではどのような考えが支配的であったか、英米の新聞記者やインテリの接していた言説をコンテクストとして共有してはじめて、オーデンとイシャーウッドの反応、考えの偏差が判るといえるのだ。というのも、彼らは中国への旅を始める前にははっきりと non-political な旅行をする、と述

べていたのだが、香港を手始めとして中国の各地をまわり、その間に大学関係者や中国で布教活動をしている英米の宣教師に会ったり、大使館での新聞記者へのブリーフィングに参加している。それと並行して現地の情勢を自らの目で見、通訳を介してではあるが現地の人々の声も聞いている。つまり、オーデンとイシャーウッドの日中戦争に関する外交的、戦術的、現場的な理解は短期間のうちに飛躍的に高まっているのだ。その結果、彼らは政治的なポジションを抱くようになり、イギリスに帰国してからは、イングランド各地で中国情勢の講演をし、蒋介石へのサポートを訴えてもいる（イシャーウッドは蒋介石へのサポートを訴えたことを明言しているが、オーデンはしていない。オーデンは政治的な結論を示唆することはしばしばあるが、明示的な物言いに関しては慎重であった）。オーデンは後年1973年に *Journey to a War* の改訂版を出した時には、1938年の時点ですでにオーデンとイシャーウッドは、中国の将来が蒋介石ではなく、毛沢東の側にあるという気がしていたが書かなかった、と述べている。35年経過してから述べたのである。

本稿では、当時の英米政府の外交政策の変化および日中の摩擦に対して英米政府がどういうコンセプトでどう対応していたかを考察していく。油井大三郎によれば、第一次大戦後、アメリカのウィルソン大統領が民族自決主義を打ち出し、そこから戦後、「新外交」とよばれるものが生じ、先進国の外交、戦争は変容を遂げつつあったのだが、日本外交はそれに適応しそこなった面があるというのだ。

オーデンとイシャーウッドが、アメリカの出版社ランダムハウスから東洋についての旅行記の執筆依頼を受けたのが1937年の6月か7月。その時点では国、地域がここと限定されていたわけではなかったのだが、1937年7月に盧溝橋事件が起こり、いわゆる支那事変が始まった（事変と称されていたのは、戦線布告が双方ともないままに、ずるずると戦争状態に陥っていったためである）。彼らが行き先を中国としたのはジャーナリスティックな感覚からすれば当然といえよう。オーデンはその後、T.S. エリオットに依頼してイギリスのフェイパー社の紹介状も得ているし、実際、*Journey to a War* は英米でそれぞれの出版社から1939年3月以降に出版されることになる（Auden, 2002, 822）。

オーデンとイシャーウッドがイングランドを出発したのが、執筆依頼から半年ほど経過した1938年1月19日。船旅なのでいくつかの箇所に寄港し、約一ヶ月後の2月16日に香港に到着。2月28日に広東などにむけて香港を発ち、武漢を含む中国内陸部を訪れ、最前線の戦闘地域にも足を踏み入れ、最終的には6月12日に上海を発つ。約4ヶ月の中国滞在であった。その後は横浜を6月18日に発っているのだから、日本滞在は一週間に満たないし、*Journey to a War* の中でも、最後に上海で4人の日本人との会談はあるのだが、その内容を見ると二人は当時の日本人の日中関係の認識に対して極めて批判的であるし、憤慨すらしているのだ。おそらく、中国滞在中を通じて、彼らは日本および日本人に対して反感を抱くようになり、日本滞在は最小限にしたいと考えたのではないかと思われる。実際最小限であったし、また、*Journey to a War* では日本滞在中については一切触れられていない。その後、日本から太平洋を横断してヴァンクーヴァーに6月28日に到着。カナダを電車で横断し、ニューヨークで2週間ほど過ごして7月17日にロンドンに戻ってきた。

さて、ここで時間を遡り、第一次大戦以降、英米は日本および中国に対してどのような外交政策をとってきたのかを見ておこう。遠回りに見えるかもしれないが、第一次大戦から見ていく必要があ

る。第一次大戦が世界史的に見て外交の転換点と言ってよく、そこに日本外交は適応しそこねた部分があると思われるからだ。周知のように、第一次大戦において、ヨーロッパは激戦地であり、多くの犠牲者を出し、史上初の総力戦で将軍や兵士だけでなく、一般市民が国家によってオーガナイズされるまさに総力戦の幕開けだったわけだが、日本は山東半島などでの局所的な戦いですんだ。そのため、多くの一般市民は第一次大戦がどのようなものであったのか、またその意義を理解することがないままに大戦間の世界を進むことになった。第一次大戦自体の戦場・戦闘行為の規模の大きさもさることながら、1917年のロシア革命も衝撃的だった。1917年の3月の革命でロマノフ王朝が倒れたが、さらに同年11月のレーニン率いるボルシェヴィキ革命により社会主義政権が樹立された。社会主義政権が樹立されたことも衝撃的であったが、外交面に関しては、この革命政府は大戦中に交戦国政府に対し「無併合・無償金・民族自決」を講和条件とする休戦協定を呼びかけた。そして同時にロマノフ王朝の政府が英仏などと戦勝の際には植民地を分割する約束をした秘密協定を暴露した（油井、29）。連合国の政府は衝撃を受けた。第一次大戦中、彼らは「正義の戦い」を訴えてきたが、この秘密協定により国際的な権力闘争であることが露呈してしまったからだ。

この事態にもっとも敏感に反応したのがアメリカ大統領のT.ウッドロー・ウィルソンだ。アメリカは第一次大戦中、1914年から16年まではずっと中立を保っていたのだが、1917年4月に「民主主義のために世界を安全にする」という御旗をかかげて対独戦に参戦した。であるのに、英仏露は領土や植民地の分割の密約を結んでいるとなれば、彼が掲げた正義は絵に描いた餅ではないか（油井、30）。危機感を感じたウィルソンはロシア革命政府に対抗して、独自の講和条件「14カ条（14条の平和原則）」を1918年1月に発表する。(1) 秘密条約の廃止、(2) 軍縮、(3) 東欧諸民族の民族自決、(4) 植民地問題の公正な解決、(5) 国際機関の設立などが提案されていた。これが欧米外交の画期的な転換点になるわけで、軍力で領土や植民地を拡大することを当然視してきた「旧外交」に代わって、国際機関の設立などによって紛争の平和的な解決をめざす「新外交」が登場した（油井、31）。無論、1日にして旧外交から新外交に代わったわけではなく、フランスのクレマンソーなどは旧外交的な立場をとり続け、ドイツの賠償金を空恐ろしい額にしたわけである。

1919年1月からヴェルサイユ宮殿で講和会議が始まる。イギリスのロイド・ジョージやフランスのクレマンソー首相らが出席していたが、日本からは西園寺公望が首席全権、牧野伸顕、珍田捨巳らが全権として出席。近衛文麿は随員として参加している。日本は五大国として参加したが、議論に参加したのは、戦争中に日本軍が占領した山東半島や南洋諸島、人種平等条項に限られていた（油井、33-34）。

日本は講和会議に参加するにあたって、事前の会議で牧野はウィルソンの「新外交」が世界の新常識になるという見解を表明し、対中政策も、治外法権の撤廃や日本軍の撤退を率先して表明し日中親善の実をあげる政策を提言した。これに対し、伊藤博文内閣で書記官長をつとめた伊東巳代治は、軍縮や海洋の自由の主張は「アングロ・サクソン」人種の現状維持を目的とする一種の政治同盟をめざすもので、それ以外の国の発展は制限されるという懸念を表明した（油井、35）。結局、原内閣としては、山東半島や南洋諸島のドイツ領土の無償譲渡に集中することに決定した。先述のウィルソンの

14カ条は、世界史で誰もが習うところだが、この牧野伸顕、伊東巳代治らのやりとりは、専門家を除いては周知とは言えないかも知れない。少なくともわたしは油井の書で初めて知った。油井の本の特徴は、彼が日本史や中国史の専門家ではなく、日米関係を中心とした国際関係史を研究してきた人であり、「1920年代に関する日本史研究の成果を概観して、その実証レベルの高さに驚くとともに、世界史や国際関係史との接合が不十分」であると考え著した本であることだ（油井、14）。

中国は、ウィルソンの「14カ条」に対して、それを公理と受け止め、大きな期待を抱いた。関税自主権を回復し、領事裁判権の廃止など不平等条約の改正がなされ、駐留外国軍隊が撤退することを期待したのである（油井、38）。山東返還も期待していたのだが、英仏は戦時中の密約で旧ドイツ利権の日本への譲渡を了承していたので、結局、中国の期待は裏切られた。山東問題では、アメリカの世論は中国に同情的であり、日本に譲歩したことは、「中国で活動していたアメリカ人宣教師の影響が強い米国社会」（油井、42）では不評だった。こうしてヴェルサイユ講和会議は新外交と旧外交が混在した状態で決着をみた。

ヴェルサイユ会議に随員として参加した若き日の近衛文麿は「英米流の平和主義を排す」という論文を寄せ、国際連盟のような構想、英米流の平和主義は、米国や英国のような持てるものの現状維持策である、として強く反発している（油井、45）。しかし近衛は会議参加後には微妙に考えを変えている。1921-22年のワシントン条約についても、日本側には、山東の権益を中国に返還することを約束させられたことを、旧外交の立場から屈辱と捉える者と幣原喜重郎や渋沢栄一のように新外交の観点から中国の門戸開放をポジティブにとらえむしろ歓迎する者がいた（油井、86-92）。その後1924年のアメリカの移民法に対して日本では広い階層からの激しい反発があった。

この間、中国では国権回復運動が盛り上がりを見せる。1925年5月30日に、日系の紡績工場でストライキが起こる。学生のデモ隊に上海共同租界の治安維持を担当していたイギリス人警官が発砲。全国的な抗議運動に広がり、租界提供の大本となっている「不平等条約」の破棄を求める。しかし列強の対応は冷ややかだった（油井、150-151）。この機会に「北米の宣教師団体の代表、57名は、ケロッグ（国務）長官宛に」中国での困難の解決は力によってではなく、友好的な会議によってもたらされるべきことを説いた（油井、152）。

この他にも外国宣教に関わる団体が、中国の国権回復に理解を示す決議をアメリカ政府に提出している（油井、153）。この部分を詳しく引用したのは、日本ではあまり理解されていないが、宣教師たちは、中国の現地に入り、地元の人々と日常生活を共にし、彼らの考えを肌感覚でも感得しているし、外交官や政府からも一目置かれているということが重要だと考えるからだ。そのことが理解できると、オーデンやイシャーウッドが宣教師に会いにいて、現地の事情を聞き、また本のなかでもかなりの紙幅をさいて彼らの話を報告しているのも、単なる彼らの思いつきではなく、まっとうな情報収集・報告であることが分かるのである。

この後、6月23日には広東で中国人のデモ隊がイギリス兵やフランス兵と激しく衝突。この事件を機にイギリス貨物ボイコット運動が激化し、イギリスの対中貿易が打撃をうける（油井、155）。英政府内では鎮圧論がおこるが、英外務省は逆効果だと反対する。そこへ北京で関税特別会議が開かれ

ることになり、国民政府は会議には招かれていなかったが、イギリス貨幣のボイコット終結を宣言し、実際に運動が終息したので、英国政府も歓迎し、対中政策の見直しを始めた。その結果、12月に「中国が新しい全国的な関税を設定し、それを宣言したらず、中国に関税自主権を享受する権利があると認める用意があると宣言すべきである」という声明を出した（油井、156）。この声明を受けて、中国の民衆は翌年1月に漢口と九江の英国租界を奪還する行為にでたが、英国政府は受け入れた。英国政府は関税自主権だけでなく、租界の返還にも部分的に応じ始めたのであり、これまでの武力を背景とした利権拡大政策を転換させ、帝国縮小政策に転換することを意味したのだが、この転換はワシントン条約の他の締約国との協議なしだったので、日本は「独善的」と評し、ワシントン体制の動揺につながった（油井、156-157）。これを受けてアメリカも条約改正に応じる声明を出す。アメリカはもともと中国に租界を持っておらず、比較的政策的転換がやりやすかった面もあるし、アメリカでは植民地をもつ形での帝国主義には反発が強く、市場として門戸開放を求める態度が支配的だった。

オーデンやイシャーウッドの対日観に対する影響の観点から考えると、この1927年以降、英米は多少の逆行はあるものの、原則として中国の国権回復を認める方向に向かったのに対し、日本は満蒙の利権に拘泥し、さらに華中へと勢力範囲を広げて行く。日本の中も陸軍と海軍の考えは一致しておらず、政治家にも和平をさぐる勢力もあったのだが、結果的には実を結ばず中国の奥深くまで侵略していく。そういうまさに日本軍が侵略しつつある時期にオーデンとイシャーウッドは、日本（軍）と遭遇したのであり、アヘン戦争以来の英国の振る舞いを棚上げにして、その当時の英米の態度と日本の態度を目の当たりにして彼らが、日本に反発を覚え中国に肩入れする気持ちになったとしても不思議なことではなかったろう。英米は帝国縮小政策に転じ「文明的な国」になっていたのに対し、日本は従来の帝国主義的態度に固執する「野蛮な国」と映ったことであろう。

3. アメリカ移住の謎

オーデンとイシャーウッドは中国を数ヶ月に渡り旅して *Journey to a War* を書いたわけだが、イギリスに帰国する途中、アメリカに渡っている。その後、いったんイギリスに帰り、再びアメリカに渡っている。その間の事情は、イシャーウッドの日記に記されている。編者のキャサリン・バックネルによると、イシャーウッドは1920年代から1983年まで60年以上にわたり、週数回の日記をつけていた。私が参照しているのはVintageから出版されたペーパーバックだが、第一巻は1939年から60年で、39年は1月19日―彼が、イングランドを発ち、アメリカに向かった日―を起点としている。1939年以前の日記はほとんど消失しているという。1939年1月19日、オーデンとイシャーウッドは、サウサンプトンからニューヨークに向かった。中国旅行に出発したときからちょうど周年だった。イシャーウッドはそういう日付の一致を気にしていた。一致することで、彼の人生がスケジュール通りに進んでいるという感覚を持ちたかったのだ。前年の夏、彼らはアメリカに立ち寄って、大急ぎにはあるがニューヨークを見ている。イシャーウッドは、大戦後の観点からは信じがたいかもしれないが、この時は、第二次大戦の可能性はなくなった、あるいは、大きく遠ざかったと考

えていた。つまりミュンヘン会議での宥和的な態度は、当初は歓迎され、第一次大戦の再来は避けたいと強く望んでいた人々をほっとさせたのだ（その安堵は結局偽りのものとなるのだが）。悲観的な人ですら、今年（1939年）はないだろうと言っていた。イシャーウッドは、アメリカに向かう船上で、自分が平和主義者であることを自覚した。彼の父は第一次大戦で戦死していた。歴史の授業やウィルフレド・オーウェンやジークフリート・サスンら戦争詩人の著作を読むにつれ、戦争を引き起こした人たちを嫌うようになった。「私はおそろしく戦争をおそれており、それゆえ密かに戦争に惹かれていた」と屈折した心情を吐露している（Isherwood, 1996, 5）。さらに「こうした神経症的な恐怖は、われわれの中国への旅でおおいに減じた。たしかにとても危険な旅ではなかった。爆弾や銃弾で命の危険にさらされたのはわずかに3回か4回だったと思う」と述べている。中国に行くと、危険度に見合った恐怖感を抱くようになり、パニックに陥ることがなくなったのだ。だからミュンヘン危機のときもむしろロンドンに積極的にとどまり、最初の空爆があればそれを見逃すまいという態度であった。（この記述からも、アメリカ行きは戦争を逃れるという意図を持っていなかったことがわかる—少なくともイシャーウッドは、読者にそういう理解を求めていると言ってよいだろう）。

さらに重要だと思われるのは、中国行きの後では、自分がスローガンや借り物の意見を繰り返すのをやめ、自分で考え始めるのは時間の問題だった、と述べている点である。イシャーウッドは、日記に次のように記している「帰還した英雄を演じている限り、考えることは不可能だった（中略）。わたしが日中戦争についてレクチャーをし、蒋介石のための援助を訴えている限り、考えることは不可能だった」（Isherwood, 1996, 6）。ここで、注意しておくべきなのは、*Journey to a War* の中では、オーデンとイシャーウッドは武漢に赴き、今この瞬間、世界中のどこよりも武漢にいたい、いるべきだと思ったという趣旨の記述があることだ。その発言の2つの意義にここでは着目したいと思う。1つは、第一次大戦後、平和が訪れたものの1930年代に入り、ファシズムの勃興やスペイン内戦（オーデンは、スペインに赴いて戦場の一部を見たし、内情を事細かにではないかもしれないが状況を把握した）が勃発し、不穏な空気が漂っていたが、そこへ満州事変、つづいて宣戦布告なき日中戦争が曖昧に始まり、その情勢・実情をオーデンとイシャーウッドは、レポートしたわけである。その中国への旅では最初は漠然とした報告であったものが、現地での日々の経験、要人との会談、大使館でのブリーフィングを新聞社の特派員らとともに聞く日々を過ごして彼らはその時点での世界の動きの最前線が武漢にあると感じ考えたということだ。第2の点は、*Journey to a War* の中で書かれているエピソードにまつることだ。武漢でアグネス・スモドレーから共産党の人物を紹介してもらえるチャンスもあったのだが、それはすでに西側のジャーナリストが実現していたことだったので、蒋介石夫人の宋美齡に会うことになり、夫人にインタビューし結果的に蒋介石にも面会している。*Journey to a War* の中で蒋介石が田舎の医者ようだった、というわかったような、わからないような人物評を記し、宋美齡のブルジョワ的な雰囲気にもかなり細かく言及していたが、政治的な支持・不支持については全く触れていなかった。オーデン、イシャーウッドが、日本の側ではなくて、中国人民の側に心を寄せていることは、*Journey to a War* の最後の部分で、日本4人との会話で、日本人がわれわれはまったく中国人に敵意はないのだ、とか、中国側に和平の気持ちがあれば和平は可能なの

だ、といった口振りに二人とも大いに憤慨し、空爆を受けていないで爆撃している側と、される側ではまったく違うではないか、と反論していることから明らかなのであるが、にもかかわらず、では、中国側の誰を支持すべきかということに関しては一切記述がない。しかし上記のイシャーウッド日記では、明確に蒋介石支持を訴えていたことが明らかにされている。ただし蒋介石への支持を訴えたのがイシャーウッド単独の行動だったのか、オーデンと一緒に行動していたのか、並行してそれぞれが訴えていたのかは明らかでない。ただ、そういった政治的な活動にイシャーウッドもオーデンも向いておらず食傷気味になっていたのは確かだ。イシャーウッドは、旅は病気のようなもので、立ち止まって自分の状況を確認することができる、としているし、さらに、「ある朝、(アメリカに向かう船の) デッキでだったと思うが、オーデンに向かって言った『あのね、ぼくはもうああいっただこと—共同戦線、党の方針、反ファシスト闘争—のどれにも信念を抱けない。それらは正しいとは思うんだけど、何かしっくりこないんだ。もうこれ以上飲み込めないって感じた』 オーデンが答えた『ああ、僕もだよ』」(Isherwood, 1996, 6)。

イシャーウッドは、言葉はこの通りでなかったかもしれないが、趣旨はこの通りで、オーデンの同意に驚いたという。そしてそれまで演じてきた役割にうんざりして、その役割を捨てることの決意を打ち明け合ってほっとしたのだ。「我々は我々の本当の職業を忘れていた。ふたたび芸術家になるのだ。われわれ自身の価値観、我々自身の誠実さを持って—アマチュアの社会主義扇動家ではなく、口先だけの共産主義者でもなく」(Isherwood, 1996, 6)。

戦争や戦争をめぐる言説、しかもそれが現在進行形であれば一層そうであるが、敵か味方か、どちらを支持するのか、しないのか、といった割り切りを求められることが多くなるだろう。実際、オーデンは、スペイン内戦時にスペインを訪れた際に、共和派によって教会や修道院が破壊され、司祭が殺されたりしたことにショックを受け(またショックを受ける自分に驚き当惑もしているのだが) ているが、それを記せば、その時点ではフランコ將軍やそれを支持する人々を利することになると考え、そのことを記したのはスペイン戦争終了後どころか第二次大戦が終わって何年も経過してからだった。ではあるが、日中戦争に関しては、中国人民に対して同情の念を抱き、あるいは中国本土を爆撃する日本に対する反感を感じたのは確かであり、中国への旅から帰って、イシャーウッドと同様に中国について講演会をしているのは確かだ。しかし、ドッズ夫人への手紙には、「あちこちで中国についてしゃべってるうちに非常に鬱になってしまった」と書いている。また数ヶ月後には、同じくドッズ夫人にあてて「自分の政治への関わりが、まがいものだった、あるいはずっとそうだったと自覚したのは、中国についてのトークだった」と述べている(Carpenter, 245)。さらに「何か役に立つのだろうか? 自分自身の仕事に専念するべきなんだろうか? もしそうなら不道德なことをしていたのか?」と記している。イシャーウッドと同じ会場であれ、別の会場であれ、二人は同じようなこと、つまり日中戦争において日本に非があり、中国をサポートすべきという趣旨あるいは聞き手がそう受け取れるような講演をイングランドのあちこちでしていた。しかし繰り返しているうちに二人とも精神的に落ち込んだり、自己嫌悪に陥ったりしている。これが、単にプロパガンダを発信する道具と化したせいなのか、それとも内容自体にも起因するところがあるのか、おそらくはその両方なのだ

ろう。日中関係について繰り返し語るにあたって、日本の中国への侵略を非難することは頭ではまったく理解可能だし、彼らもそれを基本的には信じていただろう。先述の「新外交」と「旧外交」の観点からは英米が新外交に転じたのに、日本は「旧外交」にしがみついて帝国主義的侵略を繰り返しているのである。しかしながら、その主張を繰り返すうちに、ふと英国とその植民地の関係に思いをはせることがあったろう。オーデンの左翼思想との関わりの深さに思いを致すとそこに気がつかないと考えることはほぼ不可能だと考える。私が言いたいのは、条約や協定の細部についてではない。巨視的に見て、どうやって大英帝国ができたのか。英国の植民地はどのように形成されたのか。日本が中国人民に対してなしていた蛮行は、英国には全く無縁であったのか。それは1930年代ではなかったから容認されるが日本がなしていることは現在（1938年）だから認められないのか？彼らが歴史を振り返った際に、大英帝国が巨大な植民地を獲得し、巨万の富を築いた過程に蛮行があり得たことに思い至らなかった可能性は限りなく0に近いと考える。当時の日本の侵略的、敵対的な行為を間近で見て、経験して激しい嫌悪感を感じた彼らは、それを指弾する講演を繰り返すうちに、二人とも自己嫌悪に陥ったり、抑鬱状態になったりして、もうこれ以上こうした行為を繰り返すことは耐えがたいと思い、アメリカに渡ったのだ。つまり彼らは英国の大英帝国性に思い至り、自己嫌悪に陥りアメリカに渡る決意が固まったのだと考える。

そのせいか、アメリカに渡ったイシャーウッドは、平和主義（pacifism）に深い関心を抱き、平時や戦時に平和主義者はどんな態度を取るべきか、社会にどんな貢献が可能か、と言った質問を複数の平和主義者にしている。イシャーウッドによれば、共同戦線や共産党路線などに辟易してしまった彼らに、その代替物になるものとして、オーデンにはキリスト教への回帰という道があったが、イシャーウッドの場合には、平和主義が一種の宗教に代替するものとして機能したようだ。

二人は最初はニューヨークのホテル、そしてアパートに住んでいるのだが、イシャーウッドは、ヴァーノンという男とともに西海岸のカリフォルニアに移る。ハリウッドにアパートを借りるのである。そこでヨガや瞑想を実践することを、最初は幾分の抵抗感を感じながらも始めていく。

一方、オーデンは、ニューヨークにとどまったが、ここでチェスター・カールマンという若者との出会いがあった。出会いのきっかけは、カールマンが学生で学内の雑誌の編集に携わっていて友人と一緒にインタビューに来たことだった。カールマンは読書家で、オーデンやイシャーウッドが文学作品から引用すると、それがどこからかを理解し、それに別の引用で返すような当意即妙の機転が利くタイプでオーデンの気を引いた。カールマンは過去の文学に対しても自分の意見をはっきり持ち、オーデンに対しても堂々と自分の意見を開陳するのであった。あっという間に二人は恋人同士になるのだが、オーデンの伝記作者ハンフリー・カーペンターによると、初期の頃からオーデンは性的な面で特に惹かれていたわけではないという。では、何に惹かれたのか。ここには最初に述べたアイデンティティーの問題とオルタナティヴを求めるといふ課題の2つがともに関わっている。まずアイデンティティーの問題だが、オーデンはこれまでオックスフォードでは自分と異なるタイプを追い求めその関係が長続きしなかった。オックスフォードには、筋骨隆々でスポーツにいそしむタイプと、文弱なタイプがいて、オーデンは文弱タイプは不幸である—なぜなら筋骨隆々タイプに憧れるがそちらは

文弱を気にかけていないから、と言っていた (Carpenter, 259-260)。つまりオーデンはスポーティなタイプを求めて長続きしない関係を持ってきたのだが、やっと求める方向が間違っていたことに気がついたのだ。チェスターは、オーデンと同じく文学青年だった—年齢はチェスターが14歳年下ではあるが。自分と同じタイプの人間という心地のよさ、長続きする関係を見いだしたのである。もう1つはオルタナティブの追求であるが、チェスターはユダヤ系であった。父はアメリカ生まれの歯医者であったが、大変教養のある人物だった。その両親はラトビアからやって来たユダヤ人である。チェスターの母は、ユダヤ人の劇団関係者の一家に生まれ、子役として舞台にも立っていた。しかしチェスターが幼いころに死んでしまう。父は再婚するが再婚相手はチェスターをかわいがらず離婚。父は再々婚するもうまくいかず、チェスターは父方の祖父母にあずけられる。

オーデンとカールマンの関係においては、カールマンがユダヤ系であったことは好きになった人がたまたまユダヤ系であったという以上の意味を持っていたようだ。オーデンはユダヤ系アメリカ人の言い回しやジョーク、彼らの食事、習慣までことごとく吸収しようとした。チェスターの友人によれば、チェスターのユダヤ性はオーデンにとってずっとミステリーであり魅力の源泉であった (Carpenter, 260)。イギリスの中産階級出身であるオーデンにとって、ユダヤ系アメリカ人のチェスターは1つのオルタナティブたりえたわけだろう。それは例えば、中国の旅で出会った中国人たちと比較してみればわかるだろう。良い悪いではなく、オーデンにとって中国人の言語 (習得するのは論外だったに違いない)、習慣、考え方を取り入れて自分のものにしようという発想は浮かばなかった。少なくとも *Journey to a War* の中で中国人の宗教的傾向や発想、物言いに興味を抱いている場面は何度もあるのだが、それを自分のものとしようとしている様子は一度も見当たらない。それに対しチェスターの場合、言語は英語であるし、欧米的な教養を共有しているのでオルタナティブとなりうる存在であったと言えるだろう。

オーデンの方が年長であり、オーデンにはピグマリオン的な願望があったようだが、実際にはつきあいの初期に知的形成を相手にほどこしたのはチェスターの方だった。オーデンをオペラの世界へ導いたのだ。ニューヨークに来る前はオーデンはオペラの世界にはほとんど接していなかった。最初はレコードを聴かせた。やがて二人はメトロポリタン歌劇場に定期的に通うようになった (Carpenter, 261)。

ある友人への手紙に「ヴァーグナーのファンになった」と書いているし、ヴァーグナーが近代の最も偉大で典型的な芸術家であると、熱に浮かされたようなことを書いているが、やがてヴェルディ、モーツァルトをトップクラスの作曲家だと認めるようになり、ドニゼッティやベッリーニの魅力に気づいていく。

周知のようにここからさらには、二人は共作でストラヴィンスキーやヘンツェといった20世紀を代表する作曲家のオペラにリブレットを提供していくことになるが、それはまだ先の話だ。

話を整理すると、オーデンとイシャーウッドは、中国旅行のあと、イギリスに戻り、日本軍の非道を説いた。しかしそれを繰り返すうちに、プロパガンダ的な政治活動に嫌気がさして、新天地を求めてアメリカにやってきた。二人はそれぞれ新たなパートナーを得た。そのことも第二次大戦勃発後も

アメリカに留まった一因ではあろう。しかしそれだけでは十分とは言えないだろう。アメリカ移住へと導く理屈と心情があるとすれば、それは心情面の主要な要素であり、理屈の部分では十分説得的とは言いがたい。イシャーウッドは1970年代になってから *Christopher and his Kind* という第二次大戦前の時期を扱った自伝的な本を著しているが、その中で、オーデンはアメリカ移住の理由を、ずっと後になってからBBCのインタビューで「イングランドの状況は僕にとって耐えられないものになってきた。僕は成長できない。イギリスの生活は、．．．ぼくにとっては家庭生活で、家族を愛しているけれど、彼らと住もうとは思わない」と述べている。判ったような判らないような、必ずしも論理的に説得力のある答えではない。この回答には、オーデンにこれまでも見られたようにイギリスの聴衆に対する忖度が含まれていると思う。出身校のオックスフォードでは戦時に帰国しなかったためオーデンを裏切り者として激しく糾弾する者も少なくはなかったのだ。当然オーデンもそういう非難があったことは知っている。だから奥歯にももののはさまったような言い方になっているのではないか。そこを引用した後で、イシャーウッドは自分は移住にそれほどポジティブであったかどうか覚えていないと述べている。そして彼はイングランドに対する感情がオーデンとは異なり、イングランドを家族とは考えていなかったという。楽しむこともあったが、敵意も感じた、つまり他者の土地だったという。そして次のようなコメントをカッコに括って（当時考えたことではなく、1970年代の執筆時の考えだというサインだと思われる）地の文に挿入している「第二次世界大戦後に、イングランドが帝国でなくなり、コスモポリタンな人口構成をもったマイナーな国となってはじめてクリストファーは愛するようになった、生涯で初めてのことであった。イングランドは彼がずっとそうあってほしいと思う類いの国になったのだ」（Isherwood, 1977, 235）。これは明快かつ決定的なコメントではないか。イシャーウッドは、世界中の植民地を支配している大英帝国は好きになれず、それらの植民地を失いあるいは独立を承認してごちんまりとした国になった英国をはじめ愛せるようになったと言っているわけだ。イシャーウッドと中国旅行を共にし、旅行記を共に著したオーデンは、細かなニュアンスは違っていても大筋のところでは同様の考えを持っていたと想定できるのではなかろうか。ただし、オーデンの場合、BBCという広範な聴衆が想定される場所で、植民地を支配する祖国が好きになれなかったから、祖国に帰る気になれなかったとは言えなかったのだと推察する。戦争中にはその祖国のために戦い亡くなった同胞が何万、何十万人といる。そういう状況で自分がアメリカに留まり続けたことを理路整然と述べることは、理屈が正しいとしても、いや理屈が正しければ正しいほど、戦死者やその家族の心情を逆なでし感情的な反発を招くことになるおそれもあることに思ったり、別の回路での表現をさがしたのだろう。こういった率直な物言いの回避は、スペイン戦争の時にもオーデンはしているのは前述の通りである。スペイン戦争でさえ、無用の誤解、あるいは意図せざる論争を避けるために何十年もストレートに言わないでおく人間であれば、祖国が良くも悪くも大きく変貌し、そこに何十万人もの人が犠牲になった戦争に対して、結果的に高みの見物になってしまったオーデンが「正論」を吐くことははばかられたに違いない。

4. アメリカ移住前後の詩作上の変化

当然ではあるが、アメリカに着いた途端に詩の作り方が変わるといった単純な話ではない。そうではなくて、アメリカに渡る以前から、変化の兆し、あるいは変化へと向かう原動力がオーデンの中に内包されていてそれがアメリカに渡って新しい環境、新しい出会いを得て発芽したと考えたほうがよいだろう。

渡米前に書いた詩に ‘Twelve Songs’ という連作があるが、その最後は XII ‘Some say that love’s a little boy’ (例によってオーデンの詩では edition によってタイトルが異なっていることがしばしばあるのだが、この詩の別のタイトルは ‘O Tell Me the Truth about Love’ である) で締めくくっている。書かれたのは 1938 年 1 月。

Some say that love’s a little boy,
 And some say it’s a bird,
 Some say it makes the world go round,
 And some say that’s absurd,
 ある人は愛の神は小さな少年だというし
 ある人は鳥だという、
 ある人は愛が世界を動かすというし
 ある人はそんなの馬鹿げてるという、

と韻を踏みつつ軽い会話調の詩だ。8 行 1 連で 7 連で構成されている。

最終連は

When it comes, will it come without warning
 Just as I’m picking my nose?
 Will it knock on my door in the morning,
 Or tread in the bus on my toes?
 Will it come like a change in the weather?
 Will its greeting be courteous or rough?
 Will it alter my life altogether?
 O tell me the truth about love.
 愛がやってくる時は、ちょうど僕が鼻をほじってるときなんか
 警告なしにやってくるんだらうか?
 朝、家のドアをノックするのか
 バスのなかで僕の足を踏みつけるのか?

天気が変わるようにやってくるのか？

丁寧に挨拶をするのか、ぶっきらぼうなのか？

愛はぼくの人生をすっかり変えるのだろうか？

ああ愛の真実を教えてください。

(*Collected Poems*: 144-145)

1年前に書かれた‘Lullaby’の冒頭‘Lay your sleeping head, my love,/ Human on my faithless arm; (君の眠る頭を / 僕の誠なき腕にもたれかけるがいい、いとしい人よ)’と比べると、「真実の愛」とは何であるのかを自らにまた他者に問う気持ちが強く表出されている。これまでの体験ではめぐりあわなかったが、どこかに本当の愛、自分にとって真実の愛があるのではないかという願いが込められているとも言えよう。つまり‘Lullaby’を書いた時点では短期的な付き合いを繰り返していたのだ。

実際、オーデンは後にアンセンという友人に、「この詩は個人的にはとても重要な詩だった。クリストファーはすぐにそれを見抜いたよ。そのすぐ後に起こったこと、自分の人生を完全に変える人物と実際に出会ったことを考えると、いかに予言的な詩であったかがわかるよ」と語っている (Carpenter, 234)。

同じく1938年1月に彼は、‘The Voyage’という詩を書いているが、それが *Journey to a War* の冒頭の詩である。この詩に関してもオーデンはタイトルを微妙に変えている。1939年初版では、‘The Voyage’という詩があって、続いてLondon to Hongkong というセクションがありそのセクションには‘The Sphinx’, ‘The Ship’, ‘The Traveller’, ‘Macao’, ‘Hongkong’ という5つの詩が収められている。その後はTravel-Diaryと題された散文による旅行記となる。*Journey to a War* は1973年に改版が出ているのだが、オーデンはあちこちに手をいれている。この本の初版の巻頭にはE.M. フォスターに献じられた詩‘To E.M. Forster’という詩があり、‘Here, though the bombs are real and dangerous,/ And Italy and King’s are far away,’と始まっているが、1973年版ではタイトルが‘(To E.M. Forster)’とカッコにくくられている。これはおそらく、もともとフォスターに献じた詩に手をいれたので、もともとはフォスターに献じた詩であるが、オリジナルのままではない、という言い訳めいた身振りかもしれない。最初の2行も‘Though Italy and King’s are far away, / And Truth a subject only bombs discuss,’と変わっている。オリジナルのほうが、今、ここで、爆弾はリアルな存在で危険なものだ、という切迫感があるが、それから30年以上が経過した時点で書き直したオーデンにとって、あの時代、あの季節は何であったかと振り返ったときに、大文字の真実は、爆弾のみが議論できるものだった、という認識になっている。つまり、思えば、目の前の戦争あるいは戦闘の前に圧倒されて、どちらが正義か、どうすべきかということを冷静に考えることは一人一人の個人にはほぼ不可能だったという事態を指摘しているのだと考える。

先述のように本体の詩の連作も、1939年版と1973年版では構成が異なり、前者では冒頭の詩‘The Voyage’の独立性が高く、以下はLondon to Hongkong というセクションとして一括りになっている

わけである。この詩のなかでオーデンは 'Proofs that somewhere there exists, really, the Good Place, ...? No, he discovers nothing: he does not want to arrive./The journey is false; ((大意) 本当に、どこかによき場所が存在するという証拠を見いだすだろうか? いや、何も見いださない。彼は到達したくないのだ。旅はいつわりだ)' と述べている。これまでの旅、今なしつつある旅が、彼にとってのオルタナティブを見いだすための旅であったかもしれないが、そんなものは旅で見いだせるものではない、と断念している詩とも言えよう (Carpenter, 234)。

London to Hongkong というセクションの中では、初版と 1973 年版では個々の詩の順番が入れ替わっているだけでなく、'The Ship' の次に来ていた 'The Traveller' は 1973 年版では削除されている。この詩には 'He seeks the hostile unfamiliar place,/ It is the strangeness that he tries to see/ Of lands where he will not be asked to stay; (彼は不慣れで自分に敵対するような場所を探している / 留まってくれとは言われぬ土地のよそよそしさを見たいと思っているのだ)' という一節があった。前述のようにオーデンが自らのアイデンティティおよびオルタナティブを求めて旅をしていたことが示されている。'The voyage' といい 'The traveller' といい、30 年代のオーデンの生きる姿そのものであったろうが、70 年代になって振り返れば、アメリカに移住して 30 年以上が経過し、感じ方が変わったのであろう。その結果 'The traveller' は削除されてしまった。詩の改訂からも、中国旅行の前後と、アメリカ滞在 30 年を経た 1970 年代のオーデンでは、世界観に断裂が生じていることがうかがわれるのである。

引用・参考文献

- Auden, Wystan Hugh and Christopher Isherwood. *Journey to a War*, Faber&Faber, 1939; Random House, 1939; second edition, 1973.
- Auden, W.H. *Prose Volume I. 1926-1938*, edited by Edward Mendelson, 2002.
- Auden, W.H. *Collected Poems*, edited by Edward Mendelson, 1991
- Carpenter, Humphrey. *W.H.Auden-A Biography*, 1981.
- Isherwood, Christopher. *Christopher and His Kind*, 1977.
- Isherwood, Christopher. *Diaries volume one:1939-1960*, edited by Katherine Bucknell, 1996.
- 油井大三郎『避けられた戦争』(ちくま新書、2020)。
- 辻 昌宏「オーデンの旅と転進」(富士川義之編『ノンフィクションの英米文学』2018 所収、pp.191-207)。